

オガサワラカワラヒワ センサス調査報告

2022年8月24日

一般社団法人 Islands care

関東森林管理局

1. 調査方法

1995、1996年の中村による母島属島（向島、平島、姉島、妹島、姪島）の踏査ルート（Nakamura 1997）を参考に、母島属島の各島を広域に調査するためのルートを設定し、徒歩で調査を行った（図1）。ルート上で、オガサワラカワラヒワを確認した場合は位置を記録し、観察した個体数（観察場所や時間等から同個体と判断したものを除いた個体数）から1 kmあたりの個体群密度を算出した。

2. 調査結果

1996年4月と2022年4月の結果（向島、姉島、妹島）を比較すると、個体群密度は10分の1以下になっている（図2）。

2020年以降の母島属島の5島の個体群密度の平均を図3に示した。繁殖期初期～中期（造巣～育雛）の5月は、2020年、2021年と比較して2022年は個体群密度が減少傾向となっている。繁殖後期（巣立ち）の6月の結果についても、2022年は個体群密度が減少傾向にあることが確認された（図3、図4）。また、2021年6月と2022年6月の観察個体の成鳥と幼鳥の割合を比較した（図5）。観察個体の幼鳥の割合は、2021年は全体の半数以上となったが、2022年は全体の1割程度であった。

以上のことから1996年から個体群密度は著しく減少しており、保全対策が実施され始めた2020年以降も減少傾向が止まっていないことが確認された。また、2022年は幼鳥の観察数が著しく低下しているため、繁殖が不良であった可能性が高い。要因としては、2022年4月15日に通過した台風1号の影響などが考えられる。6月（巣立ち期）の個体群密度が低下している向島、姉島、平島については（図4）、営巣地のモクマオウ林が台風によって潮枯れしたことにより、繁殖に影響があった可能性が考えられた。

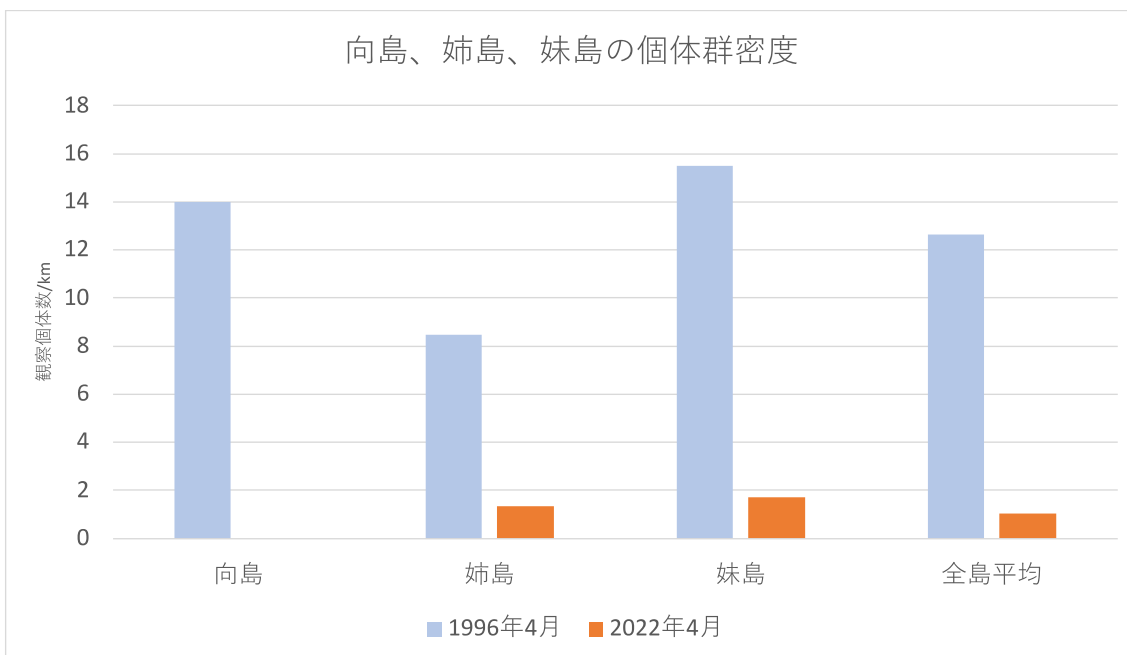


図2 1996年4月と2022年4月の個体群密度の比較(向島、姉島、妹島)
 *1996年4月の個体数密度については、Nakamura1997の調査データをもとに算出した。

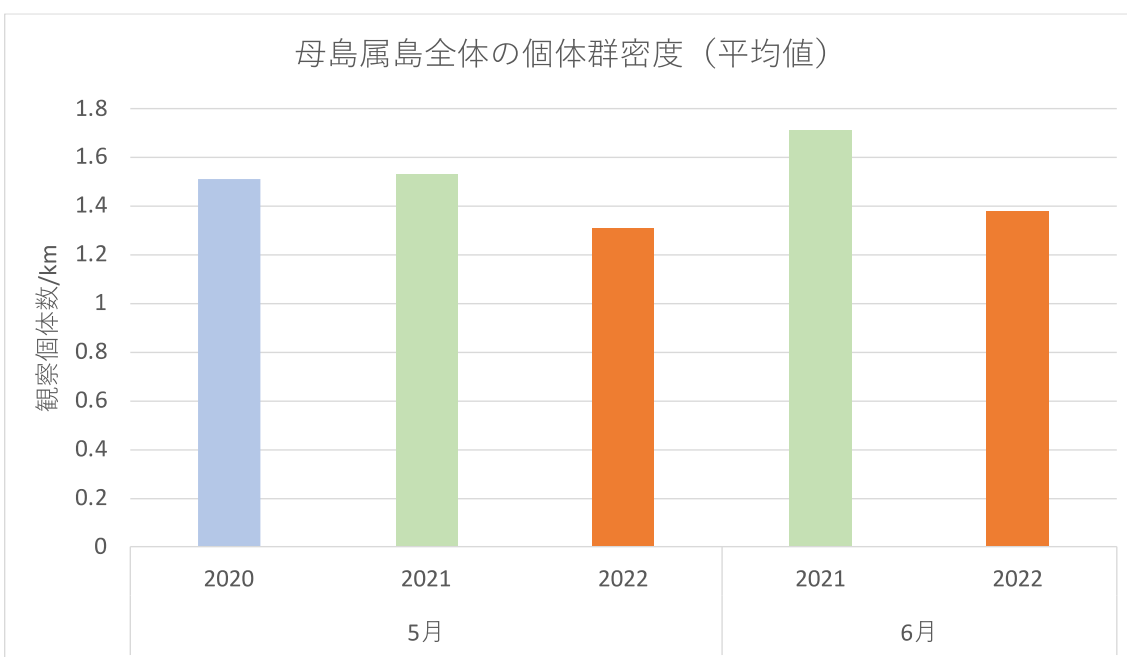


図3 2020年～2022年の個体群密度の推移(母島属島5島の平均値)

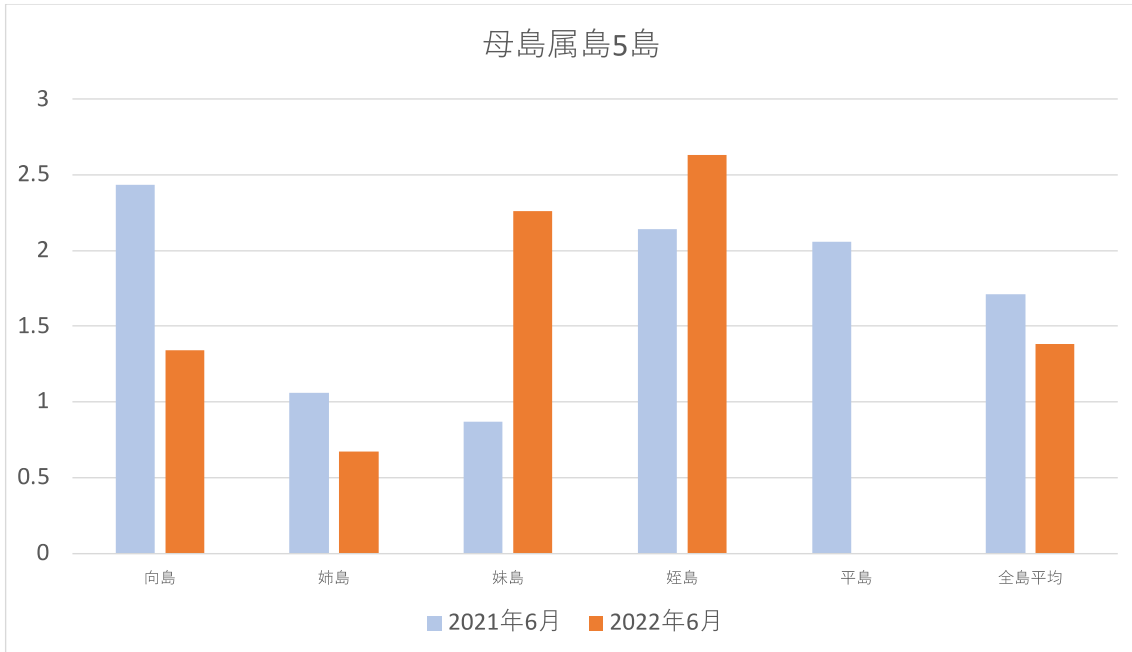


図4 2021年～2022年の各島の個体群密度の推移

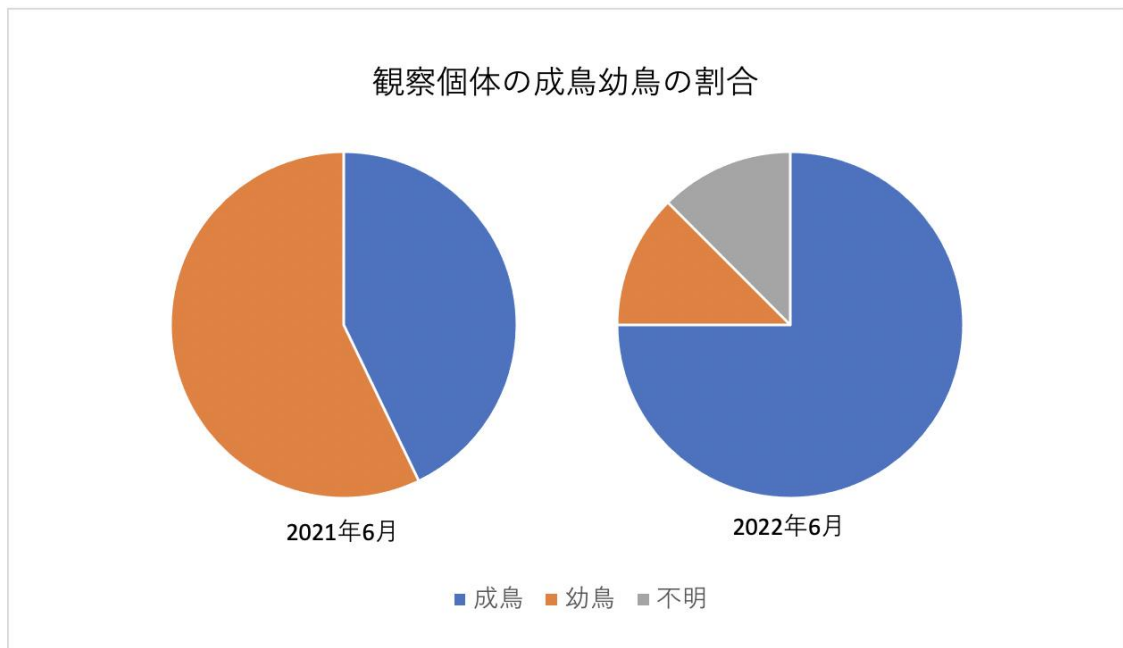


図5 6月の観察個体の成鳥幼鳥の割合

3. 引用文献

Nakamura H. 1997. Ecological adaptations of the Oriental Greenfinch *Carduelis sinica* on the Ogasawara Islands. *Japanese Journal of Ornithology*:46 95–110.

* アイランズケアが実施した調査のうち 2021 年 4 月～2022 年 3 月の間は、公益財団法人 自然保護助成基金（緊急助成）、公益財団法人 東京動物園協会（野生生物保全基金）、公益財団法人 公益推進協会（自然公園等保護基金）、株式会社モンベル（チャレンジ支援プロジェクト）、2022 年 4 月以降はサントリーホールディングス株式会社（サントリー世界愛鳥基金）による助成等を受けて実施したものである。

* 2021 年 5 月および 2022 年 5 月の個体群密度は、関東森林管理局「令和 3 年度小笠原諸島希少鳥類保護管理対策調査」、「令和 4 年度小笠原諸島希少鳥類保護管理対策調査」の調査データの提供を受けた。